

り、対象的諸器官のうち、手の非等価性が最も大である。

(2) 成長期の手の機能の分化過程の心理学、生理学上種々の研究結果をみると個人差があり、また児童期になっても利手は作業内容によって異なる。その分化は全幼児期にわたっておこなわれると思われる。

(3) 片手の scribble の幼児期における意義 (プリント参照)

(1)・(2)を考え合わせ、bimanual scribble が幼児の教育上いかなる意義があるか W. Groyinger の研究を参考に実験した。

研究方法 (プリント参照)

結果 (例画を示しつつ説明)

(1) 年令別にその表現形式をみる。

(2) bimanual scribble は呼吸運動に合致する。

(3) その表現形式は連続的に変化・発展する。4才頃までは運動的リズム感による。次第に視覚的リズム感による活動をみる。形の認識の発達期を示す。意識的描画の態度なし。また基本的表現形式のすべての pattern を創造する。

(4) 形の調和に対する興味を示しはじめる。

(5) また概念的描画意識をくずすのに役立つ。

(6) bimanual scribble は描画活動、情緒的開放形に対する認識に役立つ。

すなわち身体構造上、手の機能の分化過程にある幼児にとって、

bimanual scribble は、筋肉運動の発達、空間知覚の発達、情緒的開放に役立つのみならず、(内的要求の健全な発達)美術教育の基礎的手段ではなからうか。私も文化、教育の名のもとに、子どものやわらかい感受性と多くの創造への可能性をそこなわないようにしたいものである。

## 幼児画について (その一)

秋田・鶯野中学校 田口京子

姫路短期大学 山本道子

### 幼児画と環境

子どもの描いた絵を通してその性格や精神状態や生活状態を知ろうとすることは近時の一つの傾向である。ここに取り上げた問題は画材としての対象物が何であるか、また、年令、性別、地域的差などによっていかに変化するかを調べた。調査は A B C D E の五項目に分け対象児は五、六才児から九才児である。方法は幼児画と質問紙を用い、項目により個人質問をした。色の調査には標準色紙を使用した。

幼児画の対象に関する調査 (A) 幼児画に描かれる対象、(B) 家族構成と子どもの描く人物画の関係、(C) 絵と玩具の関係、(D) 絵に現われた遊び場所と環境、(E) 両親および子どもの絵に対する関心。

好きな色の調査 以上の項目の調査の結果(A)においては幼児画の対象物は都会の男子では人間に次いで乗物、家の順になっているのに対し農村の男子は乗物より動物を多く取り上げている。女子の場合は都会、農村とも人間に次いで植物、家が多く描かれていた。

(B) の場合、題材となる人間では日常生活で関係の深い人を好きな人として描いている。(C)(D) の場合では最も自分の好む玩具や遊びや、遊び場所が絵に現われている。幼児画には、このように環境が敏感に影響するが(E) の場合では親の絵に対する関心は幼稚園児で

はあまり影響していない。これは遊び以外に初めて知った仕事が絵を描くことであって最も興味を持つ為だろう。好きな色については地域的差は余り見られないが、幼いほど赤黄緑の原色に近い色が良い年令の増加に従って赤よりも黄や黄緑が多く次第に混色を好んでくるようである。以上のように幼児画の対象物は男女とも、人間を対象とすることは多いが男子は活動的な物を女子は静的な物を題材とし、また年令の増加に従って対象が単独に描かれず種々の物がつけ加えられる傾向がある。また、幼児画には、その環境が題材を支配している。すなわち子どもの体験や感情、願望を表現していると言えるだろう。

## Finger-Painting (6)

(6) —— 継続して描かせた指絵活動間の関係  
および経験の有無による差 ——

大阪市立大学 小西勝一郎

並河信子

山田聖子

千代田高校付属幼稚園 山下和子

**問題** Naito も指摘しているように、一般に絵画の診断においては、ただ一枚だけで評価することは危険が伴なうと考え、今回は一定期間をおき数回かかせ、未経験のものとの間に何らかの差があるかどうか、およびその数回の相互間に一貫した傾向がみられるかどうかを調査せんとした。

**方法** 大阪府下千代田高校付属幼稚園児三四名を対象とし、性別、

年令、IQ をマッチさせて実験群と対照群に分けた。

実験群は1週間ごとに一枚ずつ描画させ、対照群はその間指絵はかかせず、実験群の四回目と同日に、その第一回と同じ方法でかかせた。描画方法、評価項目については省略するが、今回は実際でも口頭でも特に指絵の描き方を教示せずただ自由にかくよう説明した。実験期間は智能検査は二月、指絵は二月末より三月中旬であった。

**結果と考察** 幼児の指絵活動のうち二六の項目について分析をこころみだが、全体の傾向として人差指による Drawing が多く、クレパスの描き方で、言語は少ないように思われた。

(A) 指絵経験の有無による相違をしらべるため、実験群の4回目と対照群の描画活動を各項目についておで検定したが有意な差を示すものは認められなかった。この結果からはわれわれの課した程度の指絵経験の有無によって大差を示さないと考えられるが、経験回数が更に大きくなるときにこれが妥当するかどうかは疑問である。

(B) 一定期間において継続的にかかせた場合、そこに一貫した傾向が見られるかどうかを明らかにするため、実験群の各回の描画活動の各項目の相関をしらべ直接確率によって検定すると有意な関連を示すものが若干みられた。すなわち期間の近接したものに関連のあるものが多いが、全体としては必ずしも一貫した傾向は見られず、各項目についても比較的関連の多い項目とそうでないものがあった。また個別的にみると非常に一貫した傾向を示す個人もあるがこの点については(7)でのべる。したがって一枚の描画活動で評価することは、よほど慎重を要すると思う。

最初にとくに指示をあたえなかつた為、クレパス的描画法に固執した影響も考えられ、その他天候、はしかのはやったことなど考えらるべき余地も多く再検討を要すると思う。